



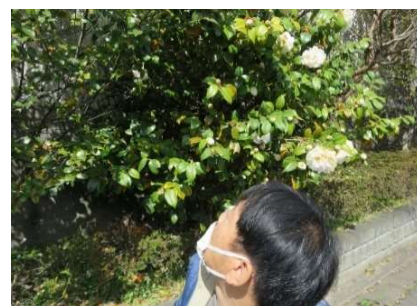
洛南エリアTOPICS

【洛南障害者デイサービスセンター「あすなろ」】

春陽そそぐ散策

季節は移ろい行き、春がやってきました。気温も暖かくなり、あすなろでは久しぶりに公園まで散歩に行っていました。

公園での目当てはやはり桜です。公園までの道中にも、いくつかの花が咲いており、それらを眺めながら進んでいきます。今年は早く咲きはじめたので、散っていないか不安でしたが、公園に着くと少し花の残った桜の木がお出迎えしてくれました。



公園で桜を眺めていると、風に吹かれた花びらが舞い、そのうちのひとひらが利用者さんの頭に降りて、利用者さんを彩ったりもしました。久しぶりの散歩で皆さんの表情は良く、笑顔の花も咲いておりました。

桜はもう散ってしまいましたが、楽しまれているこの瞬間はフレームの中に。

(洛南障害者デイサービスセンター「あすなろ」：鮫島 和寛)

【洛南身体障害者会館 多機能型事業】

リフト車を購入しました！

送迎に使用するリフト車が、納車から10年以上経過し老朽化していたため、『公益財団法人 中央競馬馬主社会福祉財団』様より助成いただき、新しいリフト車を購入しました。

車いすユーザーの方が4名乗車できるタイプで、これからの季節はドライブが楽しみです！

中央競馬馬主社会福祉財団様、ありがとうございました。



(洛南身体障害者福祉会館 多機能型事業：安江 朋香)

伏見エリアTOPICS 【伏見障害者デイサービスセンター】

週に1度のお楽しみ！ 朗読会

伏見障害者デイサービスセンターで毎週火曜日に実施している活動が朗読会です。法人ニュースで紹介することは初めてかもしれませんが、実は数年前からスタートしている活動です。

本を読んでくださるのは地域の小学校の読み聞かせでも活躍されており、伏見デイと放課後等デイサービス「らいと」を兼務されているパワフルな職員です。



本の内容は心温まるハートフルな物語や、みんなが知らない動植物の生態系のお話まで多岐にわたります。中には自分自身に本の出来事を置き換えるとどう感じるか…といった利用者さん自身に問いかける深い内容もあります。

時には利用者の皆さんからのリクエストで、昔話や動物がたくさん出てくる物語を取り入れてくださるので、今日は何の話が聞けるかな、とワクワク興味津々で参加されています。聞いたことのないお話や、鮮やかな本の挿絵、時には仕掛け絵本などもあり、利用者さんはもちろんのこと職員も聞き入ってしまう時間になっています！

皆さんがお話を聞きながら、感想を口々に話しておられる姿を見ると、利用者さんの世界や考え方が広がっている様子がよくわかります。

皆さんが毎週楽しみにされている活動ですので、これからも引き続き、好奇心や興味が湧くような朗読会を実施していきたいと思えます。

(伏見障害者デイサービスセンター：北原 侑華)

永遠のテーマ

はじめまして。中野清楓と申します。この春大学を卒業し、正規職員として皆様と一緒に働かせていただくこととなりました。

これまでもアルバイトとしてだいが学園に在籍しておりましたが、4月からは利用者さんの担当を持たせていただき、より利用者さんのことを考える機会が増え身の引き締まる思いです。

皆様のお力をお借りしながら、利用者さんのより良い生活のサポートが出来るよう日々精進して参ります。

さて、話は変わりますが、3月31日に法人の研修を受講致しました。様々なことを学ばせていただいたのですが、その中で「普通の暮らしとは何か」を考え、1人ずつ自分の意見を話す時間がありました。私の中の「普通の暮らし」と、同じ研修を受けた方々の「普通の暮らし」は、同じような違うような、不思議な感覚でした。

「普通の暮らし」とはどんなものを指すのか、私はまだ自分の納得のいく答えを見つけられていません。おそらく、永遠のテーマになると考えます。

数年後、十数年後、はたまた数十年後。働きながら成長していく中で、自分の中の「普通の暮らし」を見つけて、さらに探し続けていけたら良いなと思います。

(だいが学園：中野 清楓)

4月より京都市ふしみ学園から異動してきました芝田圭と申します。

生活介護から就労系施設に変わり、業務もちろん利用者さんの名前や顔を覚える事にも苦戦しておりますが、一日でも早く、何よりも利用者さんが変わらず過ごしていただけるように対応していきたいと考えています

また利用者さんから教えて頂ける事もたくさんあり、早くも驚かされる事ばかりですが、利用者さんと共に学び、自分自身成長していけたらと思います。

利用者さんはもちろん、ご家族の皆様方もどうぞよろしくお願い致します。

(だいが学園：芝田 圭)

普通の暮らしとは なにか

この法人ニュースですが、編集している立場という事もあり、職員の皆さんが書かれる記事を事前に確認し、毎回「何を書こうかな…」と考えています。

そのような中、「永遠のテーマ」と題し、だいが学園の中野清楓さんが書いた記事を見て、素敵な記事だなーと感じながら、「新規採用職員研修」の一部を担っている者として、また記事にある「普通の暮らしとは何か」を研修で問いかけた者として、少しばかり中野さんの記事に追記したくなり、この欄を使わせて頂き、私の感想等を書き記します。(まずは中野さんの記事をお読み下さい！)

まず中野清楓さんが感じた「同じような違うような、不思議な感覚」は、他の方との違いから生じています。「同じような違うような」は、同じである部分と違う部分の双方がある様、つまりその双方が入り混じっている様子であると考えています。

しかし、何がどのように違うのか、はっきりとした違いを言葉にはできにくい。そのため、その捉えられない曖昧さを「不思議な感覚」と表現されています。

私達は選択できない環境下に生まれてきます。そのため同じ部分と違う部分があって当たり前のお話ではあるのですが、改めて自分の「普通」を、他の人から表出される「普通」と突き合わせながら、法人理念である「普通暮らし」に寄せる。その上で「普通の暮らしとは何か？」を皆で考えてみる、という研修を行いました。

その思考の過程で、様々な感覚を皆さんは抱くことになったのではないかと想像しているのですが、中野清楓さんは、自身が感じた「不思議な感覚」、つまり曖昧さの正体に「納得のいく答えを見つめるためには「永遠のテーマになる」と記されています。

僕はこの「永遠のテーマになる」という部分を見て、中野さんの眼差しの奥にある謙虚な姿勢を感じました。

この社会福祉援助である私達専門職の仕事は、正しい正解、正しい答えのない他者の人生に関わりを持つ事になります。人それぞれが違う「個」があり、歴史がある。多様性が広がっている世界になります。

そのため、他者と違う事は当たり前であり、「普通」という曖昧さが当然ある社会福祉援助の世界の中で、容易に「納得のいく答え」にはたどり着けない。まさしく「永遠のテーマ」であり、それに近づけられるように、日々試行錯誤しているといえます。

今回新規採用職員研修に参加頂いたのは5名でした。皆さん、自分と他者との違いに対して真摯に考えて頂きました。この自分と他者との違い、つまり自分との他者との間、その差分という事になります。その差分を埋めるために、多様な物差しを自分の中で育み、当事者が望む支援を届けていく仕事になります。

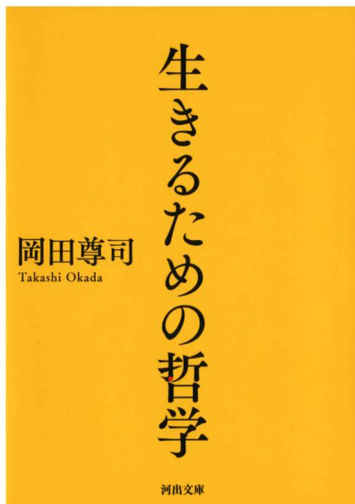
専門職は「自己覚知」が重要である・必要な事であると教えられますが、私は他者を知る事で、自分との差分を理解し、自分を振り返りつつ自分を知る事ができる、と思っています。そのような営みの中で永遠のテーマに近づけていく事ができるのではないかと考えています。

基本理念について、みんなで考えていきます

「障がいのある人とその家族が地域のなかで尊厳を保ちながら普通の暮らしができるように支援する」が法人の理念です。

では、なぜそのような理念なのか？

それは、これからの業務に携わる中で、考えていってほしいなと思っていますが、今回の中にある「普通の暮らし」というのはどういう事なのか、一緒に考えていきたいと思っています。



ここで、1冊の本をご紹介します。
「生きるための哲学」(岡田尊司 著)です。

上述した通り、私達一人ひとり、違う生き方をしています。また私達は私達自身が生きづらさを抱えている当事者でもあります。

この本では、自分のこれまでの生き方を振り返り事ができ、これから「自分らしく生き抜くための勇気と指針を見出す手がかりに」なる本だと感じています。ぜひ一読ください！

(中部障害者地域生活支援センター「らくなん」：大塚 秀樹)